

「読み」を「読み手」のものにする工夫を——実践提案を読んで

場面の「読み」を、どう生かすか

前富山大学教授 安藤 修平

1 はじめに

今回は、『故郷』を用いて、「衰えていく生徒たちの『読み』の力を踏まえて——学習者の視点に立ち、その違いを学習に生かす」ためには、どのような取り組みができるかを探った。『故郷』の理想的な取り組み方を探るところにポイントを置いてはいない。今どの教室にも見られる、国語学習に参加しようとする（参加できない）生徒たちを含めての指導をどうしたらよいかというところに、その意図がある。

2 今回のねらい

今回は、『少年の日の思い出』の指導のうち、「冒頭部分をどう扱うか」に照射を当てる。

試みに、「実践記録」(甲斐睦朗編)「語句に着目した読み方指導4 文学教材中学校」(一九九一明治図書)を見てみよう。指導時間は全十時間。「指導の実際」の項には「冒頭部分」の扱いは三時間目。○ねらい

・「やみ」に着目させて、夕暮れの情景描写をイメージ豊かに読み取らせる。

○学習活動

・「客」の呼称を指摘する。
・呼称の移りから、「わたし」と「客」の関係を考える。

・第一場面の情景、雰囲気を読み取る。
場所・時間・明暗・色彩・声。

○指導上の留意点

・「客」の呼称が「友人」になることで「わたし」と「客」が親密になっていくことに気づかせる。

・「客」が自己の内側と深くかわっている過去の出来事を告白しはじめるときの心情を、情景を表す語句(特に「やみ」)から読み取らせる。

と記されている。「語句に着目した指導」という特徴のある指導だが、この指導者の重点はやはり「少年の日の『思い』」にある。では、題名の「少年の日の『思い』」はどこへ行ってしまったのだろうか。

私も(かつて現場で悪戦苦闘していた頃は)やはり、「少年の日の『思い』」であった。それは生徒たちのほとんどの反応(最初の読みの感想)が圧倒的に「少年の日の『思い』」にあったからである。それもエーミールに憤慨し、「なぜ、指で粉々に押しつぶしてしまっただのか。」に疑問が集中する。限られた時間である

から、どうしても「冒頭部分」は急ぎ足で過ぎることになる。生徒たちの反応を大切にしようとすればするほど、そうなるってしまう。

しかし、題名は「少年の日の『思い出』」である。その鍵を握っている「冒頭部分」の「読み」の指導をどうすればよいのか、これが今回の問題提起である。

3 「冒頭部分」指導の前提

■今そこにある「危機」(その1)

——「教材研究」は大丈夫か
「教材研究」の重要性は言うまでもないが、今行われている「冒頭部分」の「教材研究」は、「少年の日の部分」の「教材研究」に比べて十分とは言えないのではないか。この点から言って、実践③の提案は、この「冒頭部分」の「教材研究の重要性」を改めて喚起したものであるべきであろう。

また、実践①の指摘にあるように、外国作品を読む場合の困難性も押さえておかなければならない。しかし私たちは、そうした外国の風土や文化を完全に把握しなければ「読む」ことができないわけではない。なぜなら、「読む」というこ

とは、その生徒なりの理解から出発せざるを得ないからであり、また読み深めてもその生徒の新しい理解(みんなで話合ったりして獲得した新しい理解)を超えることはできない。完全な理解などあり得ないからである。

■今そこにある「危機」(その2)

——「教材研究」を生かしているか
「教材研究」(正確には、私の言う「教材本文の表現研究」もしくは「教材本文の叙述研究」)が緻密になればなるほど、教室での授業に生かすことが難しくなる。手元に情報がたっぷりあるので、どうしてもそのまま授業で説明しようとする。教師の頭で考えたことは、多くの場合、生徒たちに消化不良をもたらす。同時に「読む」意欲を失わせてしまう。つまり「指導過程」とのかかわりを十分に意識し「読み」の活動の中で生かす方法を具体的に描かなければならない。実践④でも、このところを、もう少し具体的に提案して欲しかったと思う。

4 「冒頭部分」指導の基底

■今そこにある「危機」(その3)

——「少年の日の」の「思い」を的確に把握しているか

「冒頭部分」をどのように扱うとしても、もっとも大切なことは、「少年の日の『思い』」の把握である。それは、指で粉々に押しつぶしてしまっただの「僕」の「思い」をどう把握するか、ということでもある。このことについては、中西一弘『文学言語を読む Ⅱ巻』一九九七(明治図書)の解釈に賛同する。以下氏の解釈を要約(抄略も)して述べる。

(1) 「僕」の「熱情」の中心は、相反する「緊張——歓喜」と「微妙な喜び——激しい欲望」であり、この相反する

方向に進む可能性のある二つの感情が僕の中に一体として存在している、これこそ少年期の心理である。

(2) クライマックスは、「誘惑→宝→欲望→盗みを犯す」と「四つの大きな不思議な点↓ずつと美しく、ずつとすばらしく↓僕を見つめた」との競合が生み出すドラマである。「美」の発見が呼び起こす歓喜が「欲望」を呼び覚ましていく。「大きな満足感のほか何も感じていなかった」のも、当然。「熱情」を構成する二者を一度に満足させたのだから。

(3) 「盗み」よりも「美しい、珍しい」
 ちようを自分がつぶしてしまつたこ
 とのほうが僕の心を苦しめた。「美」
 のためには獲物も何も、代えて惜し
 くはない。「欲望」とは明確に切り
 離して、「美」の価値だけを見つめ
 ている。

(4) 少年である自分の、絶頂にあつた
 「熱情」には、実は、美しいものが
 与える純粹な陶醉だけでなく、つい
 には盗みまで犯すに至らせる、誘惑
 の元凶である「欲望」が、もともと
 離れがたく結びついていた。この事
 実をはつきりと認め、エーミールに
 対する行為だけでなく、それを引き
 起こした根源の「熱情」に思い至り、
 その「熱情」の対象であつた「ちよ
 うの収集」との別れを断行したので
 ある。このことは「熱情」との決別
 である以上に、「熱情」が抱えてい
 る二要素合体の発見であり、同時に
 二要素をもつ少年期の自己からの脱
 出を覚悟した行為である。癒せない
 傷をもちながら、それ故に行つた深
 い反省が、新しい世界（人間として
 の自覚ができる——成人）への出発
 を暗示している。

また、「冒頭の場面に戻って、作品の
 続きを考える」という指導はおもしろい。
 しかし、筆者も『書く』活動に抵抗を
 示す生徒もいるため、個々の生徒への支
 援が必要であろう」とし、さらには「生
 徒が書いた作品は、作品集を作つたり、
 友達同士で交感して読み合つたりするこ
 とで、互いに交流し合う場を設けるとよ
 い」と述べているが、この部分の扱いは
 「基礎・基本」ではなく「発展」にして
 どうか。中学校では、「基礎・基本」
 だけでなく常に「発展」を位置づけてほ
 しい。この部分を「発展」として興味のある
 生徒に取り組ませ、取り組んだ生徒
 同士で作品集などの活動に取り組ませる
 と良い。このままでは教師も生徒も負担
 が重くなつてしまふ。

6 再び、「冒頭部分」指導の前提

■今そこにある「危機」(その5)

——「目標」の設定と吟味

私たちの授業は「目標達成」のために
 ある。このことがなかなか理解されない。
 指導案には「目標」が必ず書かれてい
 るが、その「目標」が適切でなかつたり、

このようにとらえておかなければ、た
 とえ「冒頭部分」をていねいに取り扱つ
 たとしても、大人になつた今の思い、つ
 まり「少年の日の『思い出』」を深く読
 み取ることにはならないのである。たと
 え生徒たちがこのようにには読めなくとも、
 である。

5 「冒頭部分」指導の基本

■今そこにある「危機」(その4)

——「読み手」のものにする工夫を
 しているか

実践①②とも、指導者は、「従来は
 『少年の日』を中心に指導してきた」が、
 この「冒頭部分」も重要であると述べて
 いる。両者の実践のポイントは、「冒頭
 部分」をいかに「読み手」のものにする
 かということにある。

実践①では、まず「まっすぐ読めな
 い子、読みに入れない子、言葉と向き合
 う時間が持続できない子」について「ど
 うとらえ、どうしているか」について述
 べている。「読み手のものにする工夫」
 の第一歩は、まずこのように自らに問う
 こと、そして最後までこれらの生徒たち
 を視野に入れていくことである。

「目標」達成のためと思われる「学習活
 動」が十分結びついていなかったりす
 る。今回の実践にも「目標」が書かれて
 いない。もちろん、「冒頭部分の指導」
 を強く意識したためと思われるが、どの
 ような場合でも「目標」を設定しなけれ
 ばならない。そしてその「目標」に分か
 ちがたく結びついた「学習活動」（学習
 バイパス②注）が工夫され、指導内容が
 構想されていき、同時に評価方法が工夫
 されていく。

ただし、目標設定から評価計画のすべ
 てを支配するのは生徒の力である（今で
 は「国語科の力」、以前の「人間として
 の力」を抜きにしては考えられなくなつ
 ているが）。この目標は生徒に適合して
 いるか、もし高すぎるなら低く下げるか、
 別の目標にするか。ハードルは高すぎて
 も低すぎても「目標達成」には至らない
 （＝目標の吟味）。そして、その目標が
 一人ひとりに達成されたかどうか「何に
 よつて」「どう」把握するのかを、この
 時点で構想して欲しい。もし構想できな
 いのなら「目標」自体がもともと「評価
 不能」なのではないかと疑つてみる必要
 がある。

次に「読み手」の側に立つ工夫として
 「わくわくするか？ 冒頭部 わくわく
 させたい！ 冒頭部」を指摘したい。

このようなタイトルを付けることがで
 きること自体、今は重要なことであり、
 必要なことである。

実践②には、「情景描写」のもつ働き
 を説明したり、学習課題を提示したり、
 ワークシートの活用も加え、最後に「朗
 読劇」で身体にしみこませる、などいっ
 ぱいの工夫がある。実践②は、まさしく
 「冒頭部分」を「読み手」の意欲を喚
 起しながらねらいに迫っていく方法とま
 とめて良からう。

1 冒頭部分のみを読んで、回想場面
 への興味づけを行う。
 2 一読後、冒頭部分に戻り、優れた
 情景描写をとらえ、この場面の効
 果を考える。

3 再度冒頭部分に戻り、学習のまとめ
 として読み深めを行う。

この指導過程の優れているところは、
 冒頭部分と回想部分とを分離せず
 「読み手」に「少年の日の『思い出』」に直面
 させるところにある。ただし、その分時
 間がかかるので、「少年の日」の部分の指
 導を工夫し、時間を調整する必要がある。

(注)『よみがえれ！テレビ脳っ子・ゲームっ子
 ——すべての子にこぼる力』

安藤修平著 明治図書 二〇〇五

